

予期せぬ洪水に、迷いなく全力投入

—技術を絶対視せず、忍耐を重ねて自然と共存

PMS (平和医療団・日本) 総院長／ペシャワール会現地代表

中村 哲

堰が機能停止

皆さん、お元気でしうか。

現在、マルワリード用水路の更に下流にある「ミラーン堰」(灌漑面積一一〇〇畝、約四万人)の建設に忙殺されています。着工から一年、今春までに、取水口近傍の村落を保護する堤防をかるうじて築き、臨時の取水堰を作りましたが、予想せぬ洪水で地形が変わり、大幅に設計を変えています(カラーページ参照)。

今年二月の「真冬の洪水」の突発、七月の熱波に続く集中豪雨で堰が機能を停止、予想を超える大きな工事になっています。他方で干ばつはなお進行中、飢餓人口が増え続け、国民の四分の一の七六〇万人以上が飢餓線にあると言われています。PMSでは、「戦より食料自給」を掲げ、

灌漑設備の充実による飢餓対策を各方面に訴え続けていることは、これまで報告してきた通りです。

大洪水と地形変化

しかし、大河を相手の仕事は、計画通りに進まないことの方が多く、自然は制御できないことを思い知りました。

クナール河沿いの作業地は、急流の大河です。問題になってきた新局面は、洪水流に伴う砂州移動や河道の変化でした。

技術的には、昨年度に竣工したマルワリードIIカシコート連続堰の完成度が高く、「現状では適正技術」と宣言し、「PMS方式(斜め堰)の拡大による農村救済」を提唱した矢先でした。そこに今回の災害です。一筋縄ではいかぬことが分かり、出ばなをくじかれた思いでした。これでは「緑

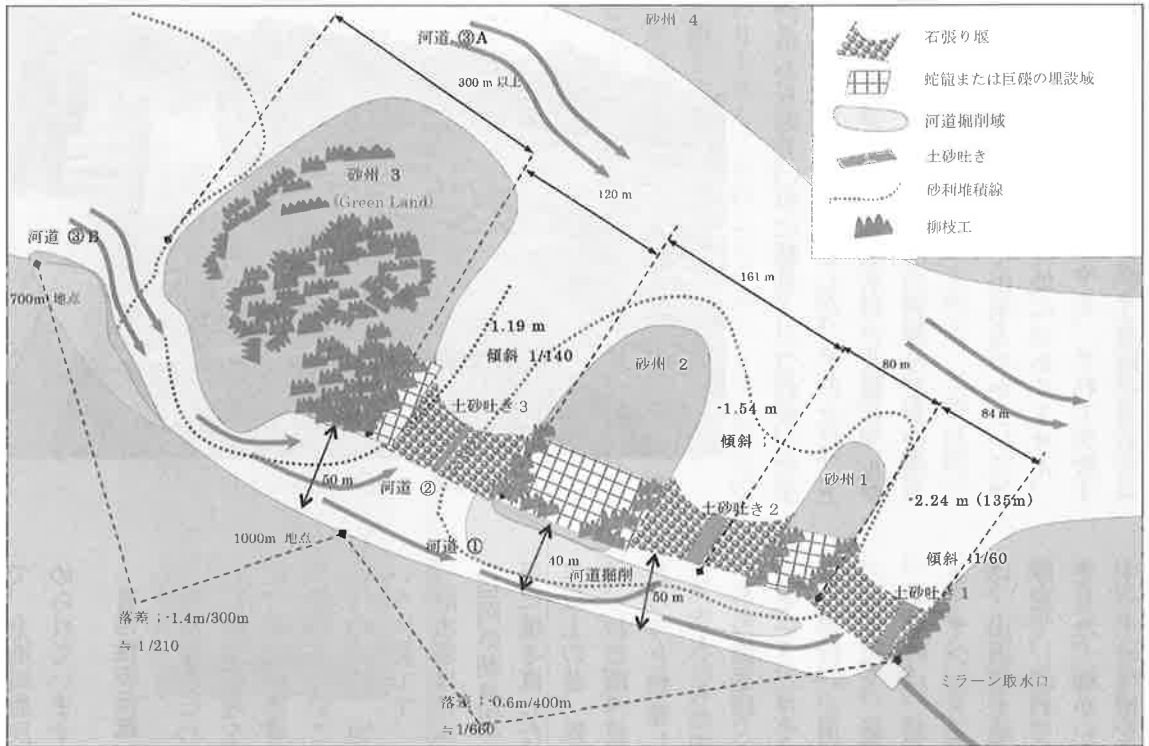


ミラーン 護岸溢水寸前。7月16日夜半から17日未明にかけて突然集中豪雨が各地を襲い、クナール河流域で氾濫が発生した。

の大地計画」が掲げるモデル地域が、モデルでなくなっています。

八月の第二波の大洪水で3km上流に分流が発生すると、作業地では、七月の第一波で溢水寸前まで迫った河の水位が一転、今度は異常に低くなり、一時は流域の渇水さえ危惧されたのです。

一年前の着工時は、浸食される村落を目前にしつつ、堤防約3kmの護岸工事で精力



ミラン堰平面図—土砂堆積を軽減するため3カ所（2カ所はコンクリート仕様）に土砂吐きを設け、交通路も確保する

を使い果たし、堰造成を楽観視してしました。そこに来た大洪水と地形変化は、さすがに絶望的で、まるで底なし沼に引き込まれたようでした。ミラン堰をめぐる一連の建設過程で、世界観が変わってしまったようにさえ思われました。

だが川の流れば、そんな人間の感情など頓着しません。次々と新たな対応を迫ってきます。既設の取水口や護岸線の改修を余儀なくされました。営々と築いてきた取水堰の、流域六十万農民はどうなるのか。その思いと気迫だけが皆の胸の内に生きています。



ミラン護岸始点から上流側に石出し水制を5基造成した。洪水後、水制間に膨大な砂が堆積し樹木の後ろを走る国道を保護している。

不思議なほど迷いなし

そうするうちに秋が来ました。水が引いた状態で、濁流に覆われていた河川敷が露わになると、変化した河道や砂州がくっきりと見えます。やっと再設計の測量が始められたのは、九月も下旬のことでした。

その結果、堰造成は、予定した堰幅二〇



山田堰の土砂吐き（余水吐き）

○mから四五〇mに延長、三つの砂州にまたがる大工事となりました。その上に、上流の措置、既設の各取水口の改修、マルワリード用水路・沈砂池の再建などを余儀なくされています。

それでも、果たして出来るのかという迷いは、不思議なほど現地にはありません。「他に方法がなければやる。それで失敗すれば神の思し召し」という達観があるから

で、全地域農民が祈る中、肅々と仕事が進められています。

自治性の伝統

なかなか伝わりにくいのは、アフガン農村に国家管理を拒む自治性が強く、政府の側でも公共事業をまともに執行できる予算や組織がないことです。支配も受けつけない代わりに、地域のことは地域自ら行うという体質です。

取水堰は日本の近世に完成した「斜め堰（福岡県朝倉市）」の構造を取り入れ、現地風に焼き直したのですが、おそらく二百年以上の昔、飢饉や一揆が日常であった時代、わが国の農村も似たような状態であったろうと想像しています。知れば知るほど、先人たちの知恵と忍耐に驚かされます。

その偉さは、堰の設計と工事を自ら行ったというだけではありません。改修を村民自らが言い、用水路という自らの生命線を二百年以上、維持してきたことです。

とすれば、私たちも似たような苦勞をたどっていることになりました。一時帰国時に、山田堰土地改良区や河川・灌漑方面の厚意で、改めて土砂吐きの構造を見学できました。細かい点は割愛しますが、見事です。土砂堆積を避け、上下流に影響を与え



職員たちと工事現場を見回る中村医師

ない工夫がきちんと凝らされています。

しかし、それ以上に、「壊れなければ強くない」という、地域に遺された言葉は、胸を刺すものがあります。技術を絶対視せず、自然の中で人間の分を弁え、忍耐を重ねて共存していくことです。近代で置き去りにされた先人の謙虚な逞しさが、ここにあります。この点こそが、はるかアフガニスタン東部の農村事情と直結し、水利

施設を維持して郷土を護る力になるのだと思いました。

生きるための戦い

かくて川沿いの寒風を衝き、工事は続けられています。私たちが掲げるのは、生きるための戦いです。巷ではテロや空爆、難民の噂が絶えませんが、私たちは「対テロ戦争」などという、おぞましい戦列には加わりません。それこそが果てしない暴力の応酬を生み出してきたからです。

水が善人・悪人を区別しないように、誰とでも協力し、世界がどうなるうと、他所

に逃れようのない人々が人間らしく生きられるよう、ここで力を尽くします。内外で暗い争いが頻発する今でこそ、この灯りを絶やしてはならぬと思います。

今年もいろんなことがありましたが、変わらぬ温かい祈りと支援に支えられ、現地は希望をもつて歩んでいます。困難な事情にもかかわらず、ここまで来れたことを感謝します。日本も大変ですが、どうぞ工事の成功をお祈り下さい。

良いクリスマスと正月をお迎えください。

二〇一五年十二月 ジャララバードにて

2016年カレンダー

「風」

画・甲斐大策

同封のハガキでご注文下さい

A2判変型(画・7点)
定価:1500円(税、送料込み)



今年も恒例のカレンダーを制作しました。部数に限りがありますのでお早めにご注文下さい(ご友人・知人の方々へのプレゼント発送も承ります)。

※代金は後払い。払込用紙を同封します。



中村 哲なかむら たく：九州大学医学部卒。専門は神経内科(現地では内科・外科もこなす)。国内の病院勤務を経て、

一九八四年、パキスタン・カイバル・パクトウンクワ州(旧北西辺境州)の州都ペシャワールに赴任。ハンセン病の診療を柱にした、貧困層の診療に携る。八六年からはアフガン難民のための事業を設立し、アフガン北東山岳部に三つの診療所を開設。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また、病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も開始した。最大時一〇カ所の診療所を運営。二〇〇〇年以降は、アフガンスタンを襲った大干ばつ対策のための水源確保(井戸掘り・カレージの復旧。作業地千六百カ所以上)事業を実践。さらに二〇〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を開始。〇三年三月からは灌漑水利計画に着手し、一〇年三月全長約二五キロが開通した。ダラエヌール診療所の年間診療数約四万六千人(二〇一四年度)。